

《資料》

竹幽文庫蔵『香道籬之菊』の紹介

—— 和歌を主題とする組香(二) ——

本稿は、「《資料》竹幽文庫蔵『香道籬之菊』の紹介—和歌を主題とする組香(一)—」(『社会科学』第46巻第3号、二〇一六年一月)に引き続き、竹幽文庫蔵『香道籬之菊』所載の組香について、とくに和歌を主題とする組香を対象に、翻刻と考察をおこなうものである。本稿では、楽の巻から、白川香・難題香・貝追香・駒止香・竜田川香・きぐす香・一声香・五行香の八つの組香を取り上げる。なお、貝追香は、謡曲を題材とするが、和歌一首を記録する組香であるため、便宜上、本稿の考察に含める。資料に関わる基本的な説明は、「《資料》竹幽文庫蔵『香道籬之菊』の紹介」(『社会科学』第46巻第2号、二〇一六年八月)を参照されたい。また、凡例および香道用語解説は、前掲『社会科学』第46巻第3号に詳述しているので、本稿では、以下にその概略を記すにとどめる。

凡例

一、翻刻本文は、底本の原態を尊重しつつ、漢字・仮名ともに通行の字体を用い、適宜、句読点を施す。また、朱書きには、

矢野 環  
福田 智子

「朱」と示し、一面の終わりには「」を付して丁数を記す。考察には、(1) 竹幽本組香の方法、(2) 和歌作品との関わり、というふたつの観点を設ける。

一、(1) の冒頭には、構造式を記す。また、解説を要する香道用語には「\*」を付す。それらの用語については、「香道用語解説」(『社会科学』第46巻第3号)を参照されたい。

一、(2) で引用する和歌作品の本文は、特に断らない限り『新編国歌大観』Ver.2(角川書店、二〇〇三年)に拠る。

一、巻末には影印を付す。

《楽卷一六》 白川香

【翻刻】

△(朱) 白川香

後拾遺集

能因法師

都をは霞とともに立しかと秋風そふく白川の関

千載集

従三位頼政

都にはまた青葉にて見しかとも紅葉散しく白川の関

此哥を以て組たる也。」樂二九オ

一 名乗紙に認出すべし。

一 都の霞の香、都の青葉の香、各一包、白川の関の香、一包

客香、以上三包出香とす地香紙に挿へ。試に出す。

一 三炷焚終りて名乗紙に認出すを、記録に當り斗を記す。点なし。下に左のことく認るべし。

白川香一炷中 関川と書

霞香斗り中り 秋風ぞ吹と書

青葉の香斗中り 紅葉散と書

皆中りは 関こゆると書

無は 関止と書べし。」樂二九ウ

白川香之記

〔表〕樂三〇オ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



\* 本香には、地香「都の霞」「都の青葉」の香(以上、試香あり)、客香「白川の関」の香(試香なし)を各一包、計三包を用い、名乗紙に答えを書く。記録には、聞き当てたもののみ、その香の名を記し、最下段には、「白川」のみ聞き当てれば「関川」、「霞」なら「秋風」、「青葉」は「紅葉散」、皆は「関こゆる」、すべて聞き違えれば「関止」と書く。

(2) 和歌作品との関わり

本組香の冒頭に掲げられている歌二首は、それぞれ『後拾遺集』『千載集』に載る。

みちのくににまかりくだりけるに、しらかはのせきにてよみはべりける 能因法師

みやこをばかすみとともにたちしかど秋風ぞふくしらかはのせき 『後拾遺集』 卷第九羈旅、五一八番

嘉応二年法住寺殿の殿上歌合に、関路落葉といへる心をよみ侍りける

みやこにはまだ青葉にてみしかどもみぢちりしく白川の  
せき 『千載集』 卷第五秋歌下、三六五番

ただし、後者の作者名については、本伝書では「従三位頼政」であり、『千載集』の「前右京権大夫頼政」とは官位が異なる。そこで注目すべきは『歌枕名寄』である。卷第二十七、「白川関」題には、当該頼政歌が収められている（七〇五九番）が、作者名表記は、本伝書と同じ「従三位頼政」である。その三首前（七〇五六番）には、右の能因歌が位置しており、本伝書が、これら二首の歌を、『歌枕名寄』に見出した可能性が指摘し得るであろう。

この能因と頼政の歌は、傍線部分で示したように、歌の構造が共通している。

都をば／霞とともに／立ちしかど／秋風ぞ吹く／白川の関

（能因）

都には／まだ青葉にて／見しかども／紅葉散りしく／白川

の関（頼政）

おそらくこの点から、これらの歌が選び出されたのであろう。客香の名「白川の関」は両歌の結句から採り、地香の名は、能因歌から「都の霞」、頼政歌から「都の青葉」を発想している。香之記に記す名目も、聞き当てた香によって、「霞」なら「秋風」、「青葉」なら「紅葉散」というように、それぞれの和歌に対応したものである。

#### 《楽巻一八》 難題香

【翻刻】

△（朱） 難題香

むかし伊勢国山邊といふ所に哥人住り。時の 帝より四方の時鳥といへる難題を下し給ひければ、

北よりも南によぎる時鳥月の出入る山にこそすめ

かく詠しかば 君限なく感思召、やかて大内に召れ、和

哥所のゆるしを得たり。山邊赤人は也。」楽三三ウ

一 試なし。

一 名乗紙にて聞くべし。

一 香皆焚終て香包を開くべし。

一 東の香、西の香、南の香、北の香、各三包充、時鳥香一包、都合十三包拵へ、分様左の如し。

四方の香十二包の内、二包除け、残十包に時鳥の香を

一 加へ、十一包打交て出香とす除たる香。は不用。【楽三三才】  
 無試十炷香の如く聞て、皆焚終りて後に、名乗紙に各何成とも印を付て出すべし。

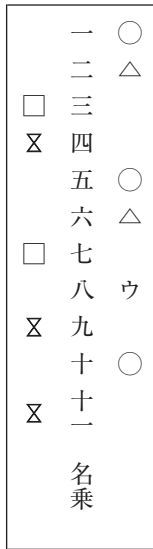
一 記録は當り斗を記す。

出香北なれば 來と書。 出香南なれば ヨギル過と書。

出香東なれば 月出と書。 出香西なれば 月入と書。

時鳥香、六炷目迄は時鳥と書。七炷より後は山の端啼と書。皆中は「四方時鳥と書。」【楽三三ウ】 出香には包の銘の通り認るべし。

一 名乗紙認様は



此圖の如く心得、何成共紛れざるやうにしるしを付て出すべし。

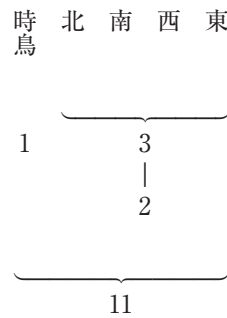
記録認様左のことし。【楽三三四オ】

難題香之記 東西除(朱)

〔表〕【楽三四ウ】

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



\* 本香には、「東」「西」「南」「北」の香各三包、計十二包から二包を除き、残りの十包に「時鳥」の香一包を加え、計十一包を用い、無試十炷香のように聞く。答えは、一炷目から十一炷目まで、同香がどのように出たかがわかるように印を付けて、名乗紙に書く。記録には、まず、香包\*を開いて披露された正答を、包みに記された香の銘(「東」「西」「南」「北」「時鳥」)のとおりを書く。そして、聞き当てたもののみ、「北」は「來」、「南」は「過」、「東」は「月出」、「西」は「月入」と記し、また、「南鳥」は、六炷目までに出れば「時鳥」、それ以降は「山の端啼」と書く。さらに、皆の場合\*は、記録の最下段に「四方時鳥」と記入する。

(2) 和歌作品との関わり

山辺赤人が、帝から下された「四方の時鳥」という難題に対

して、見事に詠んだという和歌に拠る。この説話および和歌の出典については、未だ管見に入らない。香之記に書く名目のうち、「北」の香を聞き当てたときに「来」と書くのは、「北／来た」の掛詞に拠るか。

《楽卷一―九》貝追香

【翻刻】

△(朱) 貝追香カイライ

- 一 名乗紙にて聞くべし。
- 一 組合聞にて勝負は一方／＼に有。
- 一 左方五人、右方五人と分れ聞也。
- 一 白楽天の香一包、住吉の香一包、貝の香五包客香、都合七包出香とす地香外に撰試に出す。客試なし。皆焚終て後に香包紙を開く也。（樂三五オ）
- 一 記録は皆認るべし。客独聞三点、二人より二点充、地香独聞二点、二人より一点充也。勝たる方には住吉と認め、負たる方へは白楽天と認るべし。皆中は聞の所に左の哥をしるす也。

苔衣着たる岩ほはさもなくきぬ／＼山の帯をするか

な

認様左のごとし。（樂三五ウ）

貝追香之記

〔表〕（樂三六オ）

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法

白楽天	1	コ
住吉	1	
貝	1	7

左方と右方、五人ずつに分かれて行う。本香\*には、地香「白楽天」「住吉」の香（以上、試香\*あり）、各一包、客香「貝」の香（試香なし）五包の計七包を用い、名乗紙に答えを記す。すべて焚き終わってから香包を開き、正答を披露する。

記録には、聞き当てても聞き違っても、すべての答えを記入する。客香の独り聞きは三点、二人からは二点、地香は、独り聞き二点、二人からは一点である。勝った方には「住吉」、負けた方には「白楽天」と書く。皆の場合\*は、最下段に「苔衣着たる岩ほはさもなくきぬ／＼山の帯をするかな」という和歌一首を記す。

(2) 和歌作品との関わり

謡曲『白楽天』に拠る組香である。唐の詩人、白楽天（ワキ）は、筑紫の松浦湯で、漁翁（シテ）―実は住吉の神―に出会う。

そのとき白楽天の詠んだ詩を、漁翁が即座に和歌に詠み換えるという場面に、当該歌（傍線部参照）が見出せる。

ワキ（前略）、いでさらば目前の気色を詩に作って聞かせう、青苔衣を帯びて巖の肩に掛かり、白雲帯に似て山の腰を圍る、心得たるか漁翁。

シテ 青苔とは青き苔の、巖の肩に掛かりたるが衣に似たると候ふな、白雲帯に似て山の腰を圍る、面白し面白し、日本の歌もただこれ候ふよ、苔衣、著たる巖はさもなくて、衣著ぬ山の帯をするかな。

（日本古典文学大系『謡曲集』下より）

この後、白楽天は、住吉の神によって唐に帰されるという結末になっており、住吉の神は、白楽天に対し圧倒的な力を見せる。なお、客香の名とされた「貝」は、謡曲『白楽天』には出て来ない。だが、本謡曲の舞台が松浦湊であることを考えると、干潟で貝を採るという連想は容易であろう。組香の始めに「住吉」方、「白楽天」方を決めるのではなく、勝った方を「住吉」、負けた方を「白楽天」とするところにも、謡曲『白楽天』の内容を踏まえたことが窺える。

《楽卷一二〇》駒止香

【翻刻】

△（朱）駒止香

新古今集

皇太后宮大夫俊成

駒とめて猶水かはん山吹の花の露そふ井手の玉川

新続古今集

従三位頼政

近江路や真野、濱邊に駒とめて比良の高根の花を見る哉

新古今集

藤原定家朝臣

駒とめて袖打拂ふかけもなし佐野、渡りの雪の夕くれ」

寒三六ウ

此古哥によりて組侍る。

一 名乗紙に認べし。

一 佐野、渡の香、真野の濱の香、井手の玉川の香客香、各一包充、都合三包出香とす地香、外に拵へ。試に出す。皆焚終て後に香包紙を開く也。

一 記録点は、客香二点、地香一点充也。聞の下に、左の如く認る。」寒三七オ

皆中は 駒止と書。

皆無は 落馬と書。

佐野渡斗は 袖拂ふと書。

井手斗は 山吹の瀬と書。

真野斗は 峯の花と書。

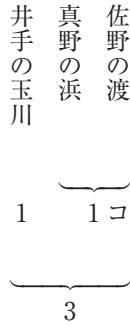
記録認様末のごとし。 樂三七七

駒止香之記

〔表〕 樂三八オ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



\* 本香には、地香「佐野の渡」「真野の浜」の香（以上、試香あり）、客香「井手の玉川」（試香なし）の香、各一包計三包を用い、名乗紙に答えを記す。すべて焚き終わってから香包を開き、正答を披露する。

記録点は、客香を聞き当てる二点、地香は一点とする。記録の最下段には、皆の場合は「駒止」、すべて聞き違うと「落馬」、聞き当てた香が「佐野の渡」のみでは「袖拂ふ」、真野の浜」では「峯の花」、「井手の玉川」では「山吹の瀬」と記す。

(2) 和歌作品との関わり

本組香の冒頭に掲げられている三首は、いずれも「こまとめ

て」（傍線部参照）という句をもち、かつ、歌枕（二重傍線部参照）を詠み込んでいる勅撰集入集歌である。以下、あらためて本文を列挙する。

（百首歌たてまつりし時）

皇太后宮大夫俊成

こまとめてなほ水かはむ款冬の花の露そふみでの玉川

『新古今集』巻第二春歌下、一五九番

題しらず

従三位頼政

あふみ路やまのの浜べに駒とめてひらの高ねに花をみるかな  
『新統古今集』巻第二春歌下、一三〇番

百首歌たてまつりし時

定家朝臣

こまとめて袖うちはらふかげもなしさののわたりの雪の夕暮  
『新古今集』巻第六冬歌、六七一番

右の三首には、それぞれ歌枕「みでの玉川」「まのの浜（べ）」「さののわたり」が詠み込まれており、それらが香の名に用いられる。さらに、「款冬の花」「高ね」（本伝書では「の」）花」「袖うちはらふ」（傍線部参照）をもとに、香之記に書く名目「山吹の瀬」「峯の花」「袖拂ふ」が案出されている。三首の歌の共通

点を軸として作られた組香である。

《楽卷一二》竜田川香

【翻刻】

△(朱) 竜田川香

古今集

よみ人不知

竜田川紅葉みたれて流るめり渡らは錦中やたへなん

是をとりて

新古今集

家隆

竜田川梔をとつる薄氷渡らはそれも中やたへなん

此哥によつて組たる香也。」楽四〇オ

一 名乗紙にて聞く也。

一 紅葉の香、薄氷の香、錦の香、竜田川の香客香、各二包充、都合八包打交、其内一包除け、残七包出香とす地香外に拵へ。試に出すべし。出香

皆焚終て後に香包紙を開く也。

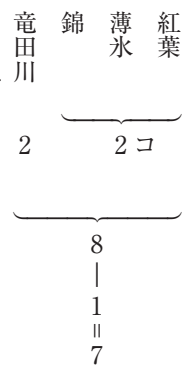
一 記録点は、地香皆一点充也。客の香、二炷ともに出たる時は、初の客二点充、後の客一点充也。もし客一炷斗出たる時は、三点充也。左のごとし。」楽四〇ウ

竜田川香記 薄氷除(朱)

〔表〕楽四一オ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



\* 本香には、地香「紅葉」「薄氷」「錦」の香(以上、試香あり)、客香「竜田川」の香(試香なし)、各二包計八包から一包を除き、残り七包を用い、名乗紙に答えを記す。すべて焚き終わってから香包を開き、正答を披露する。

記録点は、地香を聞き当てる点とする。客香は、二炷出る場合と一炷の場合とが想定されるが、前者では、初めの香を聞き当てる点と、後の香では一点とし、後者では、一炷聞き当てる点とする。

(2) 和歌作品との関わり

本組香の冒頭には、まず『古今集』の次の歌が掲げられている。

題しらず

よみ人しらず

竜田河もみぢみだれて流るめりわたらば錦なかやたえなむ



『古今集』 卷第五秋歌下、二八三番

そして、この歌の本歌取りとして、『新古今集』の集付のある家隆歌が掲げられる。だが、『新古今集』にこの歌は未だ見出し得ない。

家隆の家集である『壬二集』には、わずかな本文異同はあるが、同一歌が収載されている。

建暦二年仙洞廿首歌奉りし中に、冬歌

竜田川紅葉ばとづる薄水わたらばそれと中や絶えなん

『壬二集』二五六五番

従って、これが家隆の歌であることは、まず間違いあるまい。

『新古今集』は、竟宴本の成立後、切継ぎ時代に入るが、新しい歌を加える一方、すでに収載されていた歌を削除するといった作業が行われた。その時期の下限は、注記によって知られる限り、承元四年（一一二〇）九月であるという（『新編国歌大観』新古今和歌集解題（後藤重郎氏・杉戸千洋氏）。はたして、当該家隆歌は、建暦二年（一一二二）に行われた「仙洞廿首歌」（後鳥羽院二十首歌合）で詠まれたものである。従って、切り継ぎ終了後の建暦年間の歌が、『新古今集』に収載されているとは、

まず考えにくいであろう。あるいは、本歌が古今集歌であったことに引かれ、家隆歌を新古今集歌として対応させてしまったか。

香の名のうち、「紅葉」「竜田川」は両歌に共通する語であり、また、「薄水」は家隆歌、「錦」は古今集歌にのみ見られる。本歌と本歌取りの関係にある二首の歌に拠り、竜田川の秋と冬の情景を併せて作った組香である。

《楽巻一二六》きゞす香

【翻刻】

△（朱）きゞす香

古今六帖

中納言家持

春の野に朝啼き、すの妻乞におのか有かを人にしれ  
つ、

此古哥の心に便て組侍る。

一 名乗紙にて聞くべし。

一 春日野香、交野原香、宮城野香、武蔵野香、嵯峨野香、各

一包充、本香とす。香包の折形あり各外に掛す。右本香楽四七オ

五包打交、其内より一包密に開て香を取除け、其跡にきゞ

すと名付て、別香一炷入替て、紙の内に心覚をして、始の

ごとく包み、又交て都合五包出香とし、一包宛取て炷出す

べし。

一 出香五炷終りて、何野香ときゞすと入替たると聞たる通りに認出すべし。是は證歌の心也。

一 記録点は、独中り五点、二人四点、三人より三点充なり。独違星三つ、二人星二つ、三人より星一つ充あるべし。点は草の汁にて野草のごとくかくるも興あり。」葉四七ウ

きゞす	名乗
交野原	

名乗紙に如此認め出すべし。

一 香包の折形如左圖寸法口傳

畳たる形

開たる形

〔圖〕

〔圖〕

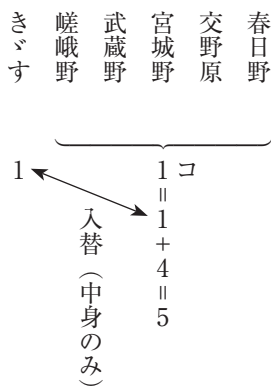
一 記録認様左の如し。」葉四八オ

きゞす香記

〔圖〕葉四八ウ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



\* 本香には、まず、「春日野」「交野原」「宮城野」「武蔵野」「嵯峨野」の香（以上、試香あり）、各一包を用意する。香の包み方には、図にあるように指定された形がある。次に、これら計五包から一包を取り出し、ひそかに包みを開いて、中の香を別香に入れ替える。これを「きゞす」と名付け、その名を香包の内側に記してから、元通りに香を包んで、他の四包に交せてから、一包ずつ焚く。すべて焚き終わってから、名乗紙に、「きゞす」の香と入れ替えた香の名を答えとして記す。

記録点は、独り聞き五点、二人聞き当てる点と四点、三人以上では三点とする。また、聞き違った人数が、独りでは星三つ、二人では星二つ、三人以上は星一つを付す。香之記には、草の汁を使い、野草の葉の形を模して点を記入するのも趣がある。

## (2) 和歌作品との関わり

本組香の冒頭には、『古今六帖』の集付をもつ家持歌が載る。だが、現存伝本と比較する時、『古今六帖』よりもむしろ、『拾遺集』本文と一致する部分が多い。

春の野に朝啼き、すの妻乞におのか有かを人にしれつつ、

竹幽本『香道籬之菊』

きじ

やかもち

春ののにあさなくきじのつまごひにおのがありかを人にし  
られて 『古今六帖』第二、一一八七番

題しらず

大伴家持

春ののにあさるきぎすのつまごひにおのがありかを人にし  
れつつ 『拾遺集』巻第一春、二一番

波線部分「朝啼」は、『古今六帖』と同じだが、「きぎすの」と「知れつつ」は、『拾遺集』本文と一致し、一首全体としては『拾遺集』に近いと見られよう。もっとも、『古今六帖』諸本においても、桂宮本をはじめとする多くの伝本の本行本文「朝啼くきじの」の傍書として、「あさるきぎすの」という歌句を得る。「朝

啼くきじの」「あさるきぎすの」は、いずれも七音という音数律の中で起こった本文異同と見られるが、一方、本伝書の「朝啼くきぎすの」は八音で、破格の字余りである。本組香が「きぎす香」の名であることから推すと、「朝啼くきじの」ではなく、「あさるきぎすの」という『拾遺集』と同じ本文であるべきところか。本伝書に見られる結句「人にしれつつ」という本文も、『古今六帖』の多くの伝本の傍書に見られるが、『拾遺集』と一致するところである。本伝書と本行本文が全く一致する『古今六帖』は未だ管見に入らないが、当該歌が、『古今六帖』『拾遺集』といった異なる歌集間における校合の可能性を含めて、伝来の過程で起こしていた本文の揺れの一端が、本伝書にも見出せるであろう。

香の名に用いられている五つの歌枕「春日野」「交野原」「宮城野」「武蔵野」「嵯峨野」のうち、「宮城野」を除く四つは、いずれも「雉」(きじ/きぎす)と詠まれることがある。

冷泉院春宮とまうしけるととき、百首歌たてまつりける  
によめる 源重之

かすが野にあさなくきじのはねおとは雪のきえまにわかな  
つめとや 『詞花集』巻第一春、六番

鷹狩

基俊

やかた尾の鷹手にすゑて朝たてばかたのの原にきぎすく  
なり 『堀河百首』冬十五首、一〇六七番

十二番 右勝

頼政

霞をや煙とみらむ武蔵野のつまもこもれるきぎす鳴くなり

『別雷社歌合』二四番

廿七番 左

兼宗

きぎすなくさかののはらのみゆきにはふるきあとをやまづ

たづぬらん

『六百番歌合』冬部、五三三番

ちなみに「宮城野」は、「萩」や「鹿」とともに詠まれること  
が多い。従つて、すべての歌枕が雉との関わりがとくに深いと  
いうわけではないようである。野原に隠れる雉を追うという組  
香の趣向から見ても、これらの歌枕は、伝統的によく知られた  
狩り場であつたことから選ばれたのであろう。

《楽巻一二七》一声香

【翻刻】

△(朱) 一声香 ヒトコハ

拾遺集

源公忠朝臣

行やらで山路暮しつ郭公今一声のきかまほしさに

此哥によつて組たる也。

一名乗紙にて聞くべし。

一行やらでの香、山路暮しつの香、郭公の香、今一声の香、き  
かまほしさにの香、各一包充、都合五包聞香とす仕立様 梅花香七。

楽四九オ

一 郭公香斗りを外に拵へ試に出す。其外の香は試なし。

一 聞香五包を一炷充焚出す。郭公の香、何炷目に出たるを聞

て書付出す。其餘の香は聞捨也。五炷聞終て後に今一声の

聞かまほしさいふ心にて、火末を又小包に夫く包分

て、交合、前のことく焚出す也。扱て、十炷皆焚終て包紙

を開くべし。此香は二度炷返す故、人数多は聞がたし。又、

香木も其心得有て、火末永き香木を考用ゆべし。』楽四九ウ

一 記録点は、始の郭公斗り独聞二点、二人より一点、後郭公

斗は、独聞四点、二人より三点充、初後の郭公を聞たるは、

各二点充の増をかくるべし。聞の褒美を書く也。

始の郭公中り 上の句を書

後の郭公中り 下の句を書

始後郭公二炷中り 一首を書

二炷不聞は 眠と書

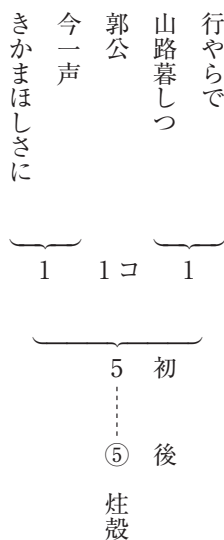
認様左に記す。』楽五〇オ

## 一声香之記

〔表〕 葉五〇ウ

## 【考察】

## (1) 竹幽本組香の方法



\* 本香には、「行やらで」「山路暮しつ」「郭公」「今一声」「きかまほしさに」の香、各一包計五包を用いる。本組香では、初段で焚いた香の火末（焚き殻）を後段で焚くため、初段の香包と、その焚き殻を包むための中身が空の香包を一組にして、五組用意しておく。この香包の仕立て方は、梅花香（本伝書では射巻に収載される）に倣ったものである。梅花香では、青の香包と赤の香包を一組にし、包紙の色によって前段と後段の香を区別している。

さて、「郭公」の香のみ試香を行ってから、本香に入る。初段では、五包を一炷<sup>\*</sup>ずつ焚いて、「郭公」の香が何炷目に出たかを名乗紙に書く。その他の香は聞き捨てにする。後段では、初段

で用いた香の火末を、用意しておいた包紙に個々に包む。そして、出香の順序を無作為に決めるため香包を交ぜてから、初段同様に一炷<sup>\*</sup>ずつ焚く。名乗紙には、「郭公」の香が何炷目かを書いて答えとする。十炷すべてを焚き終わってから香包を開き、正答を披露する。

本組香は、一度焚いた香をもう一度焚くため、連衆の人数が多いと、聞き当てるのが難しくなる。また、用いる香木も、焚き終わりの香が長く続くものを選択する必要がある。

記録点は、前段の独り聞きは二点、二人以上は一点とする。また、後段の独り聞きは四点、二人以上は三点である。初段・後段を両方聞き当てる時、二点ずつ、計四点が加算される。香之記の最下段には、褒美のことばとして、初段を聞き当てる時、本組香冒頭に掲げられた和歌の上句「行やらで山路暮しつ郭公」を、また、後段では下句「今一声のきかまほしさに」を、さらに、皆の場合<sup>\*</sup>は一首全体を記し、両方聞き違った場合は「眠」と書く。

## (2) 和歌作品との関わり

本組香の冒頭には、次の『拾遺集』歌が載る。

北宮のもぎの屏風に

源公忠朝臣

行きやらで山ちくらしつほととぎす今ひとこゑのきかまほしさに  
『拾遺集』卷第二夏、一〇六番

組香の眼目は、下句の「今ひとこゑのきかまほしさに」(時鳥の声を)あと一声聞きたくて)という表現に、初段で焚いた香の焚殻を後段でもう一度聞くとという趣向を重ねたところにある。また、「郭公」の香のみ聞き、他は聞き捨てにするのも、「今一声」を求める和歌の内容に即した趣向であろう。

《楽巻一二十八》五行香

【翻刻】

△(朱)五行香

- 一 試なし。
- 一 名乗紙にて聞べし。
- 一 木火土金水の香、各二包充拵へ、五行を一包充、左右に分置き、先つ左方の五包を焚出し終て右方の五包の内より二包取て焚出す残三包は不用。七包皆終て包紙を開くべし。」樂五二オ
- 一 後二炷の香を、始五炷の内に何炷目と同香なると聞て、名乗紙に認出すなり。
- 一 後二炷の香を聞中たる斗に、其哥の上句の五文字を認る。不中は明置く也。点をかけるに及ず。香元に後の二炷には朱

星を付るべし。

五行の哥

定家

木(朱) 國とめる民の竈の煙にも外山の木々のもとぞしら

る、」樂五二ウ

同

火(朱) ふかき夜の道に先達松の火のひかりをおくる契り

はかりや

同

土(朱) わきそめし始もしらずあらかねの土よりなれる四

方の海山

同

金(朱) 霜さへて月影白き風のうちにおのが秋なる鐘の音

かな

同

水(朱) 行多なき山のしづくの露斗り流る、水のすへのし

らなみ

一 記録認様左のごとし。」樂五二オ

五行香之記木土除(朱)

〔表〕樂五二ウ



み

(三三三番)

これらの歌の中には、単独で『夫木抄』他の歌集に載るものもあるが、『新編国歌大観』を検する限り、五首まとまって載るのは、『拾遺愚抄員外』のみである。また、本書所収歌との語句の異同も全くない。本組香が、直接これを参看したかどうかは即断できないが、『拾遺愚草員外』の後世における享受の一端として看過できないであろう。

また、香之記に記す名目として、五行の題をそのまま示す、「外山の木木」「松の火」「あらかねの土」「かねのおと」「ながるる水」といった歌句は用いられない。和歌そのものを知らなければ、一見、題との結び付きがわかりにくい、「國とめる」「ふかき夜の」「わきそめし」「霜さへて」「行ゑなき」という各々の歌の初句を書く趣向にしたところに、和歌を素材として組香を作る際の、本伝書のひとつの姿勢が窺えよう。

なお、前掲『拾遺愚抄員外』の冒頭に「十五首歌」とあるのは、「木」「火」「土」「金」「水」の題の歌の後、「東」「西」「南」「北」「中」「青」「黄」「赤」「白」「黒」という題の歌十首が続ぎ、全十五首が一連の歌群であることを示している。

## 附記

本稿は、「古典籍の保存・継承のための画像・テキストデータベースの構築と日本文化の歴史的研究」(同志社大学人文科学研究所第19期研究会第4研究、および科学研究費助成事業基盤研究(C)課題番号16K00469、いずれも二〇一六〜二〇一八年度)における研究の一部である。

なお、竜田川香所載の『新古今集』の集付のある家隆歌の出典については、小山順子氏にご教示いただいた。ここに御礼申し上げる。









正古奇小くして組付る

一名共小徳下

一佐津波の香 真種の源の香 丹の玉川の香 香也 香香

一色光初合二色出香は 香外も 香也 皆禁煙後 後

香色後 園こ

一祀流と 香香二点地香と 与光也 園の 小丸の 如く徳

皆中々 約止の 香

皆々々 庭馬の 香

佐津波の 香 神拂の 香

丹の 香 山の 香

真中の 香 峯の 香

祀流徳像末の 香

(楽・三七丁表)

(楽・三七丁裏)

駒止香記

本	真種 <small>の</small> 渡	佐津 <small>の</small> 渡	丹 <small>の</small> 渡	峯 <small>の</small> 渡	山 <small>の</small> 渡	峯 <small>の</small> 渡
名系	志津 <small>の</small> 渡	佐津 <small>の</small> 渡	丹 <small>の</small> 渡	丹 <small>の</small> 渡	丹 <small>の</small> 渡	丹 <small>の</small> 渡
名系	丹 <small>の</small> 渡	丹 <small>の</small> 渡	丹 <small>の</small> 渡	丹 <small>の</small> 渡	丹 <small>の</small> 渡	丹 <small>の</small> 渡
名系	丹 <small>の</small> 渡	丹 <small>の</small> 渡	丹 <small>の</small> 渡	丹 <small>の</small> 渡	丹 <small>の</small> 渡	丹 <small>の</small> 渡
名系	丹 <small>の</small> 渡	丹 <small>の</small> 渡	丹 <small>の</small> 渡	丹 <small>の</small> 渡	丹 <small>の</small> 渡	丹 <small>の</small> 渡
名系	丹 <small>の</small> 渡	丹 <small>の</small> 渡	丹 <small>の</small> 渡	丹 <small>の</small> 渡	丹 <small>の</small> 渡	丹 <small>の</small> 渡
月日						

(楽・三八丁表)











